

川崎市の人口は約130万人。日本の人口の約100人に1人は川崎市民

川崎市、大正13年7月1日市制施行

川崎市は、関東大震災の翌年、大正13(1924)年7月1日に川崎町、大師町及び御幸村の2町1村が合併して誕生しました。(市制施行)

80年間で、人口は約26倍、面積は約6.5倍

市制施行した大正13年末の川崎市(面積22.23km²)の戸籍人口は50,188人(男24,877人、女25,311人)で、女性の数が男性の数を上回ったのは、この年から昭和元年までの3年間のみで、昭和2年以降現在まで、川崎市は女性より男性が多い都市となっています。

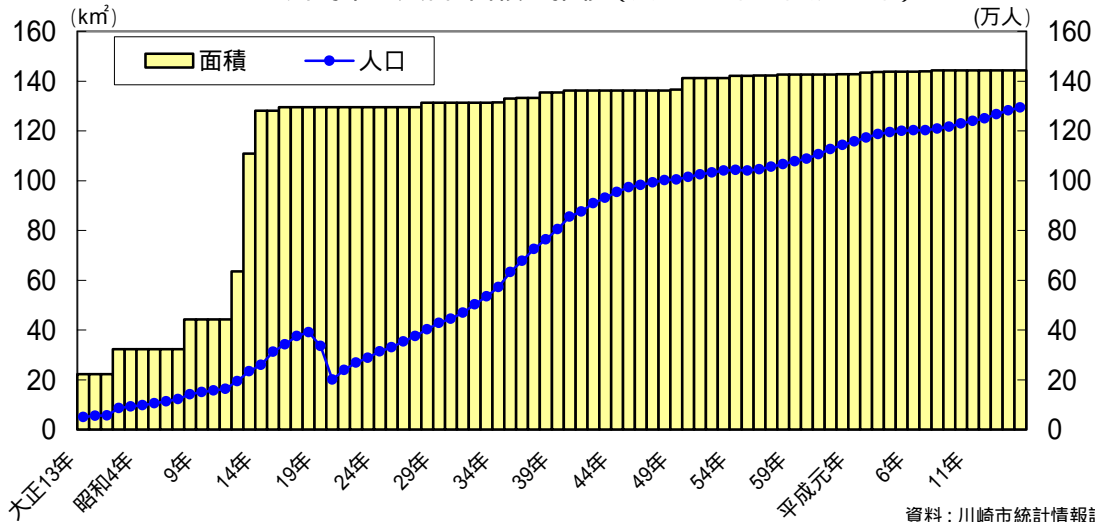
(大正13年12月末日現在人口):(平成16年7月1日現在人口)
=50,188人:1,305,264人=1:26

(大正13年12月末日現在面積):(平成16年7月1日現在面積)
=22.23km²:144.35km²=1:6.5

(平成16年10月1日現在 川崎市の人口1,306,021人)

人口130万人到達日
平成16年4月6日
市制施行80周年の本年(平成16年)4月6日に川崎市の人口は130万人を超えました。
ちなみに、100万人到達日は、川崎市が政令指定都市になった翌年、今から31年前の昭和48年5月8日でした。

川崎市の人口・面積の推移(大正13年~平成15年)



資料:川崎市統計情報課

川崎市は97番目の市

明治22年に39の市が誕生(市制施行)してから、大正13年末までに、市の数は、ちょうど100になりました。

大正13年の2月11日には清水市、4月1日には別府市、宮崎市、都城市、そして、7月1日に川崎市、9月1日には郡山市、戸畑市(北九州市)、10月1日には鶴岡市が誕生しています。

80年前は、パリでオリンピック

市制施行80周年の平成16年はオリンピックがアテネ(ギリシア)で開催。80年前の大正13年は、パリ(フランス)でオリンピックが開催され、日本からは、4つの競技に19人の選手が参加し、レスリングで銅メダル1個(日本の通算3個目のメダル)を獲得しました。

川崎の人口

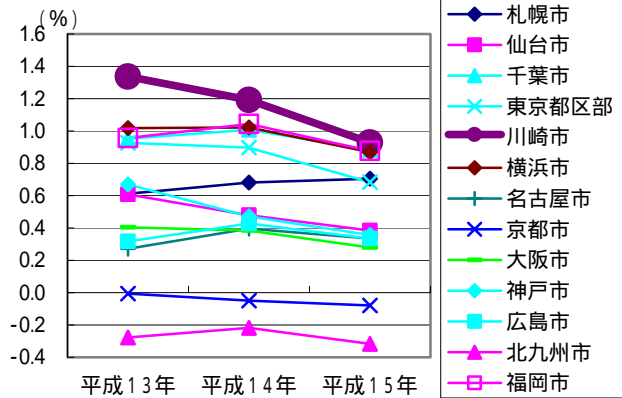
人口増加率は、平成13年から3年連続で、大都市中最も高い

1年間で1万1912人増加

平成14年10月から平成15年9月までの1年間で、川崎市の人口は、11,912人増えました。これは、高津区千年の人口(12,684人、平成15年9月末現在)にほぼ匹敵します。

また、平均すると1か月で約千人、1日で約33人の川崎市民が増えたことを示しています。

13大都市別人口増加率(平成13年~15年)



自然増加率は、昭和61年から17年連続で大都市中最も高い

資料：川崎市統計情報課

平成14年

自然増加率(‰)	
川崎市	5.2
仙台市	4.3
千葉市	3.8
広島市	3.8
福岡市	3.7
横浜市	3.5
札幌市	2.3
名古屋市	2.0
神戸市	1.2
京都市	0.8
大阪市	0.8
東京都区部	0.7
北九州市	0.3
自然増加数 ÷ 人口 × 1000	

資料：大都市比較統計年表

出生数から死亡数を差し引いた自然増加数の人口に占める割合は、13大都市中最も高くなっています。これは13大都市中、出生率(人口千人当たり)が最も高く、死亡率(人口千人当たり)が仙台市に次いで低いことが反映されています。また、平成14年中の婚姻率(人口千人当たり)も8.3パーミル(‰、例：8.3‰ = 0.83%)で2番目の東京都区部の7.3パーミルに比べ、1ポイント高い1番目です。

出生率(‰) (平成14年)

1	川崎市	10.8
2	広島市	10.2
3	仙台市	9.7
13都市平均		9.3

婚姻率(‰) (平成14年)

1	川崎市	8.3
2	東京都区部	7.3
3	福岡市	7.1
13都市平均		6.7

資料：大都市比較統計年表

死亡率(‰) (平成14年)

13	仙台市	5.4
12	川崎市	5.6
11	千葉市	5.9
13都市平均		6.8

性比 (平成14年)

1	川崎市	107.8
2	横浜市	102.2
3	千葉市	101.4
4	名古屋市	98.8
(中略)		
11	神戸市	91.0
12	札幌市	90.7
13	北九州市	89.5
13都市平均		96.2

資料：大都市比較統計年表

女性100人に対し、男性107.8人(平成14年)

性比(女性100人に対する男性の人数)は、大都市中、最も高く、性比が100を超えるのは、川崎市のほか、横浜市と千葉市だけです。

出生時から市内現住所に住む人は、約12万人

1日あたり転入者は296人、転出者は280人(平成15年)

川崎市は、平成14年には13大都市中、福岡市に次いで転入率(人口千人当たり)、転出率(人口千人当たり)が高くなっています。最近10年間の転入数、転出数は、それぞれ約11万人で、単純に総人口を割ると、12~13年で市民が入れ替わることになります。ただし、平成12年国勢調査によると、出生時から現住所に住んでいる人は120,664人(区別では、川崎区が23,665人で最多)で、総人口に占める割合は9.7%と、13大都市中6番目に高い割合です。

また、最近10年間の出生数は1万3千人台で、死亡数は約7千人となっています。

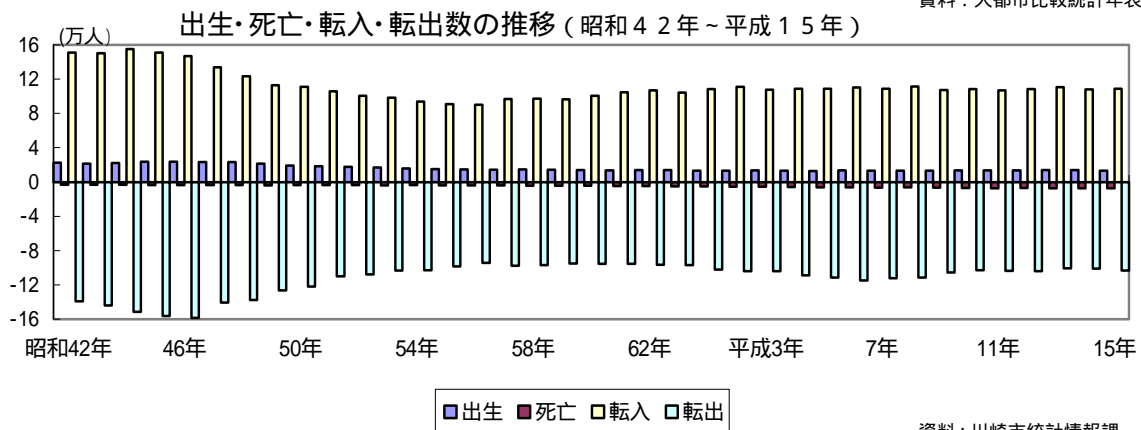
転入率(‰) (平成14年)

1	福岡市	85.8
2	川崎市	84.4
3	札幌市	75.8
	13都市平均	70.4

転出率(‰) (平成14年)

1	福岡市	81.2
2	川崎市	78.7
3	仙台市	75.3
	13都市平均	67.7

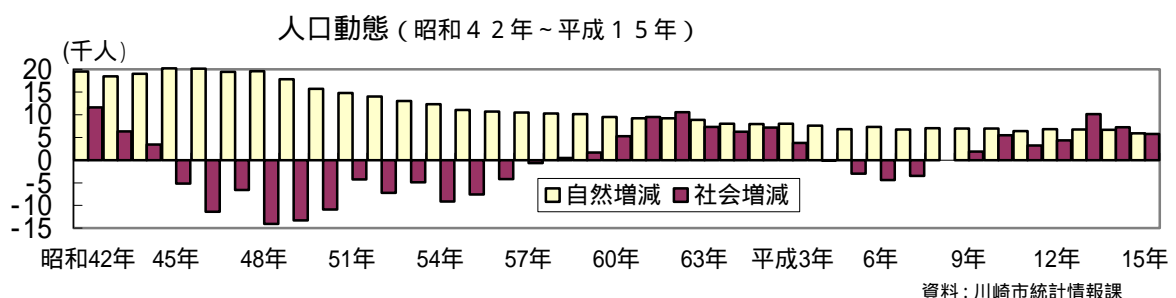
資料：大都市比較統計年表



社会増加のピークは昭和36年で、転入者が転出者を35,994人上回る

転入数から転出数を引いた数が、プラスであれば社会増加、マイナスであれば社会減少といます。川崎市では、昭和21年から昭和44年まで、24年連続社会増加でした。その間、昭和36年に35,994人増加のピークがありました。一転、昭和45年から昭和57年までは、13年連続社会減少となりました。それ以降は、平成4年から平成8年までを除き、社会増加の傾向にあり、平成15年には5,761人の増加でした。

また、自然増加数(出生数-死亡数)は、昭和45年がピークで20,200人でしたが、平成15年には5,949人になりました。



川崎の人口

川崎は若い世代のまち

15～64歳人口構成比が最も高い(平成12年国勢調査)

15～64歳の川崎市民の総人口に占める割合は73.9%で、13大都市中最も高く、65歳以上人口の構成比は、12.4%で最も低くなっています。

また、平均年齢も38.8歳と13大都市中、仙台市、福岡市に次いで低くなっていることから、川崎市は大都市の中では比較的、若い世代のまちであるといえます。

15～64歳人口構成比(%)	
川崎市	73.9
千葉市	73.0
仙台市	72.2
13都市平均	70.8

(平成12年国勢調査)

資料：大都市比較統計年表

65歳以上人口構成比(%)

13	川崎市	12.4
12	千葉市	12.6
11	仙台市	13.2
	13都市平均	15.1

(平成12年国勢調査)

平均年齢(歳)

13	仙台市	38.4
12	福岡市	38.6
11	川崎市	38.8
	13都市平均	40.4

(平成12年国勢調査)

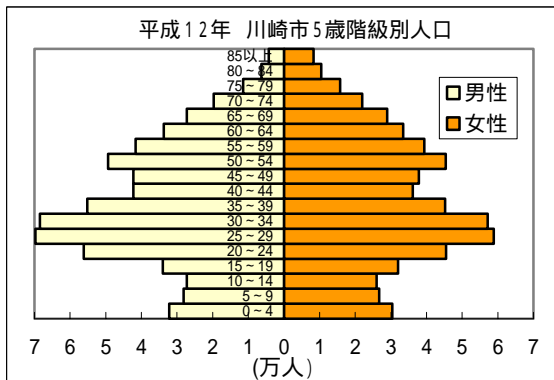
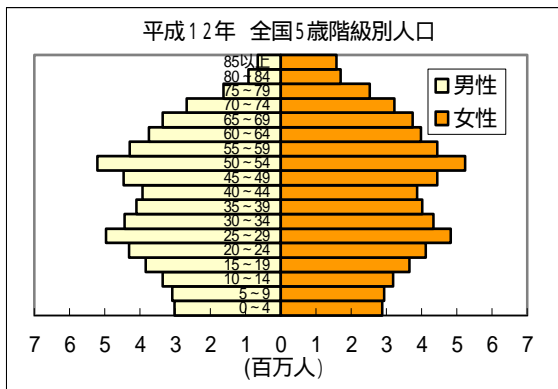
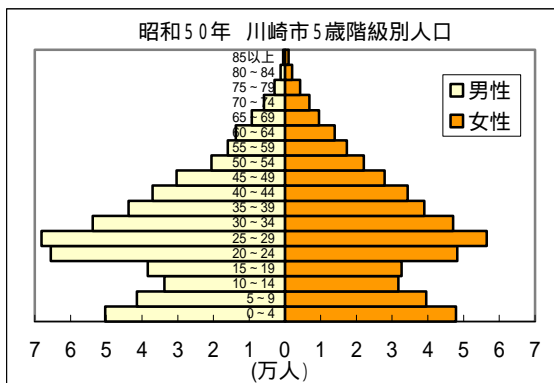
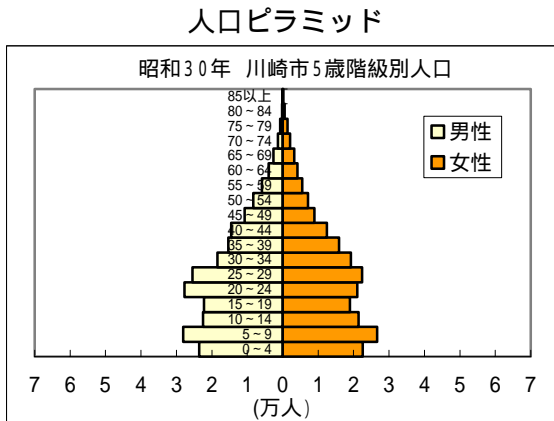
資料：大都市比較統計年表

川崎市の人口ピラミッドは、星型

年齢別人口構成(図示したものが、人口ピラミッド)をさかのぼってみると、戦争で減少した人口が、戦前の最盛期まで回復した昭和30年は、29歳以下の各5歳階級人口が、男女とも2.5万人前後で、30歳から徐々に減少しています。

昭和50年は、昭和45年からの13年連続の社会減少により、人口増加にブレーキがかかった時期ですが、国勢調査で100万人を超えた年で、20歳代が大きく張り出した、星型です。

平成12年は、出生率の低下に伴い19歳以下の人口がすぼんだ星型をしています。また全国は、2つのピークをもつ、つぼ型です。



資料：川崎市統計情報課